



GOVERNOR'S MONTHLY LETTER 2008-2009



ガバナーメッセージ

“職業奉仕理念はロータリアンの魂”

職業奉仕月間によせて



国際ロータリー第2710地区

ガバナー

諏訪昭登

職業奉仕理念の沿革

「ディアボーン街の奇跡」と呼ばれ、ポール・ハリスを創設者とするロータリーが、「四人の使徒」といわれるポール・ハリス（弁護士）、シルベスター・シール（石炭商）、ガスターバス・ローア（鉱山技師）、ハイラム・ショーレイ（洋服屋）によって1905年2月23日、シルベスター・シールを初代会長として創立されました。そのごく初期のシカゴRCにおいて、今日のロータリーの大原則や一般的慣習にまで高められて、現在に至っている数多くの協議決定事項が成立していることは、驚くべきことでもあります。とりわけ、一業一会員制と例会出席義務の二つはロータリーが今日まで発展して来た根源を成すものです。とは言え、ロータリーは、初めから“奉仕”という理念を標榜したわけではなく、会員同士の親睦と、職業上の相互扶助という二つの目的（1906年1月発表の綱領）で運営されるエゴ的原始ロータリークラブでありました。1906年、ドナルド・カーター（弁理士）への入会勧誘に際して、ロータリーの独善性、閉鎖性、そして非社会性を指摘されたハリスは早速、綱領第三項として「シカゴ市への貢献と、市民としての誇りと忠誠心を普及しよう」とつけ加え、ここに、はじめて漠然とした対社会的目的を自覚するに至りました。このことは、社会奉仕概念の芽ばえとして翌1907年、シカゴ市に公衆便所を設置する運動をロータリーが提唱し、1910年に公費によってその実現を見たこと

により、最初の社会奉仕活動として結実したのです。しかしながら、今で言う奉仕の概念（Service）が存在していたわけではなく、クラブ内は親睦中心派が圧倒的であり、対社会的意識の推進を目指したハリスは、大きな悩みの中にもありました。そこに1908年1月、フレデリック・シェルドンとチェスリー・ペリーが入会して来ました。ハリスは、のちに、その著書 This Rotarian Age 「ロータリーの理想と友愛」（1935）の中で、このことを“天の佑け”と語っています。シェルドンはハリスと熱心に語り合い、母校ミシガン大学経営学理論から発想した奉仕の概念（Service）をロータリー運動の理論的根拠として確立、推進すべく、ともに同志として歩むこととなりました。（ロータリーの哲学者）。またハリスはロータリーの拡大構想をペリーに語り、ペリーはその後、40年に涉って成功裏にハリスの目的達成の功労者となったのです。（ロータリーの建設者）。さてその奉仕の概念が、ロータリーの理念として純化され文章表現されたのは、1908～1915年ごろのことでした。職業人をもって組織されたロータリーは、当初の物質的互惠主義偏重から“Exchange of idea”「発想の交換」を中心とする精神性倫理性昂揚への変換をはかりつつあったのです。その成果として、ロータリーの職業倫理観の最初の表明となったのが、二つの標語であります。シェルドンとペリーの強力な行動力を得て、1908年、サンフランシスコRCが第2番



目のクラブとして誕生し、さらに拡大が進んで1910年、全米ロータリークラブ連合会（16RC、1500名）が結成され、シカゴで第1回大会を開催しました。（RIはこれをもってRI創立としている）ポール・ハリスは初代会長となり、チェス・ペリーは幹事（後年、事務総長と呼称）となったのです。

シェルドンは、奉仕概念を簡潔に表現したフレーズを、遂にミネアポリスの床屋を出た時に発想し、この大会の晩餐会席上で標語の原型として“*He profits most who serves his fellows best*”（最もよく仲間に奉仕する者は最も多く報いられる）と発表しました。この時点ではまだ、シカゴRCの内部事情に遠慮しているように思えます。しかしながらこれこそ一般的奉仕概念（Service）の最初の表明と言っても過言ではないと考えます。翌1911年、ポートランド大会でシェルドンはこれを“*He profits most who serves best*”（最もよく奉仕する者は最も多く報いられる）と修正発表し、満場の喝采を得ました。またミネアポリスRC初代会長フランク・コリンズは“*Service, Not Self*”（奉仕だ、自己ではない）を発表し、この二つは非公式ながらロータリーの標語として採択されました。（のち1950年公式標語、1989年、“*Service Above Self*” 第一標語となる）これらの思考の盛り上りは、ロータリアンが心得るべき職業倫理としてロータリー思想の基本となり、職業を社会への奉仕の機会と考えることを基盤として、一般的奉仕概念確立へと昇華されはじめ、1910年シカゴ大会の5ヶ条の綱領の中にもはじめて職業上の道義昂揚に着目した文言が表現されております。シェルドンの職業上の永続的成功の原理としての奉仕（実業倫理主義）と、コリンズの自己滅却型の奉仕（宗教倫理主義）はその後、ロータリーで二つの思想的潮流を形成し、様々な内的、外的論争を惹起することとなりました。

1910年、カナダのウィニペグRCが米国以外で初めて結成され、拡大が加速された結果、1912年、ロータリークラブ国際連合会がグレン・ミードを会長として（ハリスは名誉会長となる）50RC、5000名でドゥルース大会で発足しました。この時、「職業を社会に対する奉仕の機会として道義的向上をはかる」という意味の表現が綱領に登場し、「奉仕」という文言が初めて公式に用いられました。当時の情勢の中では、コリンズ主導の宗教倫理主義が優勢であり、その頂点で成立したのがラッセル・グライナー（1913～'14国際連合会会長）の提唱のもと、アイオワ州スー・シティーRCの2年間の委員会活動の成果で、1915年に画期的な事績として発表されました。それは“*Rotary Code of Ethics*”「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓」（小堀憲助訳）であります。「倫理訓」は職業倫理の上にロータリーの基礎を置こうという決意表明であり、今でいう「職業奉仕」の理念たる職業倫理の具体的説明を行って、ロータリアンのみならず全職業人にこの原理を拡めることを目指したものであります。つづいて「倫理訓」の考えを土台として、ロータリー最初の教育書たる“*A Talking Knowledge of Rotary*”「ロータリー通解」（小堀憲助訳）が、1916年に国際連合会の“*Committee of Philosophy and Education*”「理論及び教育担当委員会」（ガイ・ガンデイカー委員長）からロータリーの基本理念と原則を一冊のパンフレットとして発刊されました。一般に「ガイ・ガンデイカーの“*A Talking Knowledge of Rotary*”」と呼ばれ「倫理訓」と共に、初期ロータリーの運動方針を確立したものと言えます。のちにガンデイカーは1923～'24RI会長として、日本の関東大震災に際し、東京RCへ総額89,000ドルの義援金をRIその他から贈り、そのことが、以後の日本のRCの活動の大きな火付け役の役割を果たした



GOVERNOR'S MONTHLY LETTER 2008-2009

とされています。

「倫理訓」は第6条「自からを危うくしてもアフターサービスをせよ」と、第11条が信奉する「黄金律」の裏面に存在する「他を滅ぼすより他に滅されんことを欲す」という点について余りにも非現実的且つ宗教的思考が強すぎるという点についての論議を内在しながら、少なくとも1920年頃まではこのような宗教倫理主義による“Service, Not Self”の立場が優勢なロータリーでありました。この間1918年カンザスシティ大会で綱領の中に「価値ある事業の基盤としての奉仕の理想を奨励、育成する」が表現され“Ideal of Service”「奉仕の理想」が初めて登場しました。この辺りで奉仕に関する考え方について多くの熱心なロータリアンが激しい論陣を張っている中で、ダラスのロータリアンのメルビン・ジョーンズは、徹底した団体奉仕を目指して1917年、同意見の29クラブを統合してライオンズクラブを設立するという事件もありました。二つの潮流の混乱の中でハリスとシェルドンは実業倫理主義の立場を貫き、コリンズ死去という状況変化もあり、遂に“Service, Not Self”を“Service Above Self”（超我の奉仕）へと改変することに成功したのです。ハリスとシェルドン達が主導的立場になって来たと言うことでしょう。1922年、ロータリークラブ国際連合会がR I（国際ロータリー）と名称変更されたのを機会に、同年6月6日以前の1245 R Cを除き、爾後加盟クラブはすべてR I 定款、細則並びに標準R C定款の採択遵守が義務づけられ、現在とほぼ同様の綱領も採択されました。綱領の本文に、ロータリーとは事業の根底に「奉仕」を置くべしとする理想を提唱する活動であることを宣言したのであります。「倫理訓」はR I 細則第16条として手続要覧に載り（和訳では「道徳律」）、1951年に全文掲載を中止したのちも、1980年に完全削除されるまで、

ロータリーの職業倫理宣言として存在し続けました。削除されたとは言え、その本質的価値と効力は否定されることなく、今で言う職業奉仕の基本理念として、現在でも脈々と生きています。1923年、セントルイス大会でいわゆる決議23-34号が採択され、のちに「社会奉仕に関する1923年の声明」と題されながらも、ロータリーの奉仕理念全般についての結論としたのであります。起草者はナッシュビルR Cのウィル・メイニア・ジュニアとシカゴR Cのウィリアム・ウェストバーグで、ロータリーの奉仕に関する実践原理として、従来からの論議即ち実業倫理主義と宗教倫理主義の対立を解消させ、二つの標語を合わせてロータリーは利己と利他の調和を目的とする人生の哲学であると宣言しました。また奉仕の考え方について個人、団体双方の立場からの統一方針を見事に確立し、宗教倫理から実業倫理を基本とする方針を明確にしたものといえます。ハロルド・トーマス（R I 1959-'60会長）はその名著「ロータリーモザイク」の中で「ロータリーは1923年に成人に達した」と述べています。ロータリー世界で主導権を握ったポール・ハリスはこの時期、「語るべきことはすべて語った。今こそ実践へ」と檄をとばし、ロータリーは理論から実践への方針を強化することになりました。その結果、1927年、“Aims and Objects Committee”「R I 総合企画委員会」が発足し、今で言う四大奉仕部門が、初めて確立され、“Vocational Service”「職業奉仕」の名称も登場したのであります。継続的論議を内在していた「倫理訓」はこの際、その配布を自粛することになりました。他方で1928年に古沢 文作氏の手で日本に移入された「倫理訓」は、1936年、日本型論理訓として古沢 文作氏によって5ヶ条の「大連ロータリークラブのロータリー宣言」がその結実を見て、日本ロータリアンの研鑽と心意気を示した力作でありました。米国では1932年、



ハーバート・テラーが職業活動の基準として“Four-way Test”「四つのテスト」を考案、成功し、テラーが1939年、シカゴRC会長となった時、倫理訓より簡明、便利ということでRIに採用され、急速にロータリー世界に浸透して行きました。1954〜’55年、RI会長となったテラーは、版權をRIに移譲し、自らのRIターゲットとしたので、全世界のロータリアンの思考、言動の尺度として定着しました。しかしながら「四つのテスト」は職業奉仕に関しては、一つの基本的道具であっても主体となるものではないとされ、一般的判断基準としての扱いとなっている。邦訳も“Four-way”は四つ辻のことであり、四つ角に立ってどちらの道を選択しようかと言う時の基準というのが、正しいと思われておりますし、内容の邦訳も不正確と言われております。RIは1948年、パーシー・ホジソン（1949〜’50RI会長）の労作として“Service is my Business”「奉仕こそわがつとめ」を発刊し、職業奉仕の本格的解説をはかったが、その和訳は読みづらかったものの、大きな事績として輝いております。1955年「奉仕の冒険」（ロータリー総論）1959年「平和への七つの道」（国際奉仕解説）はそのシリーズでした。

1951年の全文掲載停止（名称のみ残す）に続いて1980年、規定審議会はRI細則第16条「倫理訓」（道徳律）を削除することを決議しましたが、このことは倫理訓第6及び第11条の強い宗教色についての論議が絶えることなく続いていたので、その種の争いに終止符を打ち、ロータリーは宗教とは異なるものだということを、最終的に宣言したかったからでしょう。ところがその結果、RIとしての職業宣言を失った形となったので、各RCは決議23-34号第2項に謳われているように、各自の職業倫理観の確立並びに宣言を各々が行うよう求められることとなりました。現実には自覚も研鑽も充分でなく、殆んどのRCで、職業倫理は底辺に「倫理訓」を意識しながら、しばらくは

空白時代となってしまったのであります。

そこで1987年、RIは40年ぶりに職業奉仕委員会を開催して問題解決をはかり、1987年、「職業奉仕に関する声明」を採択し、職業奉仕は個人だけでなく、クラブとしての取り組み方の具体的な説明も行いました。

さらに1989年には、現在のロータリーの職業倫理として「ロータリアンの職業宣言」を採択しここに職業奉仕理念の確立がひとまず完結した形になりました。「職業宣言」は、職業奉仕の一枚看板として我々ロータリアンは自覚、実践を求められているわけであります。

1931〜’32シドニー・パスコールRI会長は「職業奉仕の理念はロータリーの綱領に固有のものであり、ロータリーを貫く一本の金の糸である」と語っています。ロータリーは“Ideal of Service”「奉仕の理想」という表現の、人間としての倫理をあらゆるジャンルに鼓吹、拡大し行こうとする、いわば社会改良運動といえると思います。その中心理念として創立当初から職業人の集まりを自覚して、他には無い形での職業倫理探求を行い、その決意としてロータリーの職業奉仕理念を内外に宣言しているのです。この点こそ、職業奉仕はロータリーの独自性だといわれる所以であります。

“職業奉仕理念はロータリアンの魂”です。

大胆にまとめて見れば、「職業奉仕理念の中心たる職業倫理は、各自の自己改善の出発点を提供し、ひいては職場に夢と潤いを与え、各自が正当な利潤と幸福を得て、やがて職場の潤いが社会全体の潤いとなり、さらには世界平和につながることを目指すロータリーの原点」と言われる通りでしょう。

“ロータリーは人間の生き方であり、善意で気取らない健全な、そして親切な生き方である”

ポール・P・ハリス